

佐伯藩の江戸城

外堀普請を追って

出 納 和基夫

(会員 所沢市北原町)

東京では地下鉄工事やビルの建設工事にともない、各地で遺跡の発掘が行われている。江戸時代の遺跡が多いが、その中には現在埋没している江戸城外堀石垣も含まれる。その石垣普請に佐伯藩がかかわっていた部分が発掘され、公開見学会も開かれたことは会報202号の「ふるさと歳時記」で紹介されているとおりである。

筆者もこの件に関して資料を集めたり、関連現地を訪れたりして追いかけていたのであるが、概要が報告された後では二番煎じの感は免れないが、それらを踏まえてやや詳しくご紹介したい。

たまたま訪問した千代田区立四番町歴史民俗資料館で、佐伯藩が普請した石垣が発掘されたという展示物を見た

のがきっかけであるが、遺跡二箇所にわたって見つかったのは佐伯藩を含めごく少数であり、過去の文献と一致する物的証拠も明瞭であったことから、佐伯藩の普請部分が発光を浴びている。

一、江戸城外堀普請概要

そもそも外堀普請とは何かというと、徳川幕府を開いた家康以来続いた江戸城工事のうち、最終かつ最大級の工事で寛永十三年(一六三六)三代家光のときに、全国の大名を動員して行われた普請である。これによって、神田橋から幸橋・溜池を経て、赤坂・四谷へ筋違橋までに至る螺旋状にめぐる外堀や外郭門が完成した。

具体的には鍛冶橋から溜池落口および赤坂門までの新規枳形・石垣を構築する「石垣方」を前田藩以下の西国大名が担当し、牛込・赤坂喰違土橋間の掘削を行う「堀方」を仙台藩以下の東国大名が担当して、総数一二家の手伝普請によって行われたものである。佐伯藩が参加した石垣方は大名六家が組頭になり中小大名がその下についたといわれる。石材・木材はすべて手伝大名持ちであり、石材は伊豆の石丁場から切り出され船で搬入さ

れた。五万石以下の大名は出丁場を持たないため、大名の下に入って採石に従事したといわれる。(表一・石垣方の助役大名表② 資料番号参照)。

現在、江戸城東半の堀は埋め立てられていて見ることができないが、西半の堀は国指定の史跡江戸城外堀跡となっており都心の水辺空間として親しまれている。埋められた堀の一部は、地下鉄南北線建設工事に伴う遺跡発掘調査によって明らかになった。これら調査の成果は報告書にまとめられているが、一般には四番町歴史民俗資料館(以下資料館とする)や地下鉄南北線市ヶ谷駅の「江戸歴史散歩コーナー」で概要を見ることが出来る。発掘された外堀遺跡の位置を図に示す(図一・寛永十三年の江戸城外堀普請区域図③参照)。

二、千代田区丸の内二丁目遺跡

資料館に展示してあった丸の内一丁目遺跡については次のように説明されていた。「前半略」一方、江戸城東方の堀では、丸の内一丁目遺跡で鍛冶橋門に近い堀の石垣が発見された。この堀は砂層を掘り抜いて人工的に作ったもので、石垣は土台木の上に三段の根石を築くなど

表 1. 石垣方の助役大名②

番号	大名	領地	石高	石垣高	枋形・石垣面
32	黒田忠之	筑前	433,100		赤坂枋形
32	寺沢堅高	肥前	123,000		
33	松倉重次	肥前	43,000		
34	松浦隆信	肥前	63,200		
35	大村純直	肥前	27,973		
36	谷衛政	丹波	10,000		
37	蒔田広定	備中	10,000		
38	土方鑑高	伊勢	12,000		
39	小出吉英	但馬	50,000		
40	小指重親	丹波	29,711		
41	杉原重長	但馬	25,000		
42	伊東長昌	備中	10,300		
不明	宮城豊綱	一	5,000		
43	加藤泰興	伊予	60,000		
44	黒田長興	筑前	50,000		
45	黒田高政	筑前	40,000		
46	鍋島勝茂	肥前	357,036		虎の門枋形
47	生駒高俊	讃岐	171,800		味遠小枋形
48	伊達秀宗	伊予	102,154		
49	織田信友	大和	31,235		
50	織田信勝	丹波	36,000		
51	秋月種泰	日向	30,000		
52	島津忠興	日向	30,070		
53	遠藤慶利	美濃	27,000		
54	一柳直盛	伊予	68,000		
55	京極高広	丹後	78,200		
56	京極高三	丹後	35,000		
57	菅木道兼	津波	10,000		
58	織田高長	大和	10,000		
59	古田重恒	石見	50,400		
60	久留島通春	豊後	14,000		

番号	大名	領地	石高	石垣高	枋形・石垣面
1	前田利常	加賀	1,192,760		筋違枋形・欄石
2	松平忠昌	越前	625,000		浅草枋形・欄石
3	毛利秀就	長門	369,411		四谷枋形
4	松平直基	越前	50,000		
5	松平直良	越前	25,000		
6	本多成重	越前	43,300		
7	九鬼隆季	丹波	20,000		
8	細川忠利	肥後	541,169		御成枋形
9	蜂須賀忠英	阿波	257,000		牛込枋形
10	森長健	美作	186,500		市谷枋形
11	有馬直純	日向	53,000		
12	立花宗茂	筑後	109,600		
13	立花種長	筑後	10,000		
14	木下建俊	豊後	30,000		
15	楠葉一遵	豊後	50,065		
16	稻妻紀通	丹波	45,700		
17	池田光政	備前	315,000		小石川枋形
18	池田光仲	因幡	320,000		溜池欄石
19	松平隆澄	播磨	63,000		
20	池田輝興	播磨	35,200		
21	池田長常	備中	65,000		
22	池田重政	播磨	10,000		
23	平岡重勝	美濃	10,270		
24	建部政長	播磨	10,000		
25	九鬼久隆	筑前	36,000		
26	中川久盛	豊後	70,440		
27	山崎家治	備中	30,000		
28	戸川正安	備中	22,500		
29	森山一玄	大和	13,000		
30	毛利高直	豊後	20,000		



◆ 文部科学省構内遺跡
文部科学省の敷地内に位置します



◆ 丸の内一丁目遺跡
東京駅の八重洲南口に位置します

図1 寛永13年の江戸城外堀普請区域(資料3に上屋敷、物産ビル位置を加筆)③

丁寧な構築法であった。さらに図や写真のように石垣石の表面には刻印がなされ、刻印の種類によってこの地点が寛永十三年の普請において豊後佐伯藩毛利家、備中成羽藩山崎家、豊後岡藩中川家の担当した工事区間であったことが明らかになった①。この遺跡は平成八、九年、平成十六年の二回にわたり発掘されており、黒田組三家と池田組五家の担当であることが分かった。佐伯藩が関係する池田組の区間は五家の担当で、柳川立花藩に残っていた石垣方普請丁場図によれば、各大名の割り当てはそれぞれ九鬼大和守（三、六万石）二〇、七二m「メートル換算」、松平「池田」新太郎（三一、五万石）五〇、一〇m、毛利市三郎（二万石）一一、〇〇m、山崎甲斐守（三万石）二五、三八m、中川内膳正（七万石）三八、三三mで、枘形工事を持つ池田藩以外は石高に応じた長さが割り当てられている。石垣は当初高かったものが現在三、四段のみ残っていて、石一個の重量はほぼ五〇〇〜一、一〇〇kgであったといわれる。石垣石には各大名家の刻印が打たれているが、大名によって差があり、佐伯藩毛利家はほとんどの石に刻印を打っているのが特徴で「◇」印が多く、他に「矢筈」印が見られる。（図一、

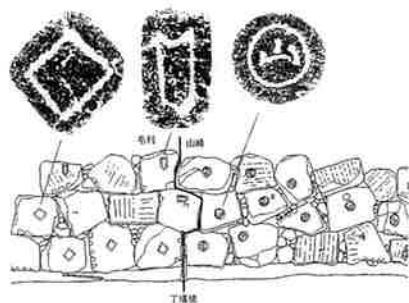


図3 大名丁場と刻印石⑨

（丸の内一丁目遺跡）丁場ごとに刻印が異なる。丁場の石積みは、双方の石を交互に積み、積み目が縦に通らないよう配慮されている。

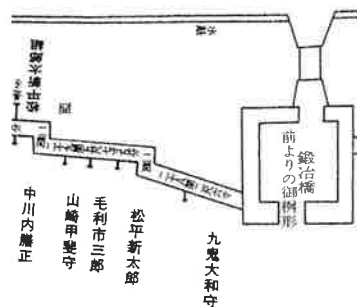


図2 石垣方普請丁場の模式図・部分⑨

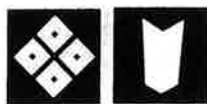


図4
四つ目結紋(左)
と矢筈紋(右)

石垣方普請丁場図の模式図Ⅱ部分、図三、大名丁場と刻印石 参照)。なお、毛利市三郎とは佐伯藩主を継いだばかりの第三代毛利高直の幼名である。

三、千代田区霞ヶ関文部科学省構内の遺跡

この遺跡は資料館によると、文部科学省庁舎の建て替えのため、二〇〇四年三月から発掘され、外堀石垣遺構が発見された。丸の内一丁目遺跡と同じく備中岡山藩池田新太郎が組頭を勤めた丁場で、北側から撰津三田藩九鬼大和守、石道惣築(全家共同)、備中庭瀬藩戸川土佐守、豊後佐伯藩毛利市三郎、備中松山藩池田出雲守であった。これも寛永十三年の「天下普請」で城門の一つ虎ノ門の西に続く長さ約六〇mであった。これらの一部は一般公開されたが、公開区間は庁舎通路部分の長さ約二五m高さ約七、六mの石垣で、庭瀬藩戸川家と佐伯藩毛利家が担当した区間である。ここの遺跡では佐伯藩はほとんどの石に矢筈印を打っている。その佐伯藩の石の刻印から両藩の普請境が確認されている(写真一、通路部分石垣全景③、写真二、毛利家と戸川家の丁場境③参照)。毛利家は家紋として当初四目結を用いたが鶴丸になり、矢筈

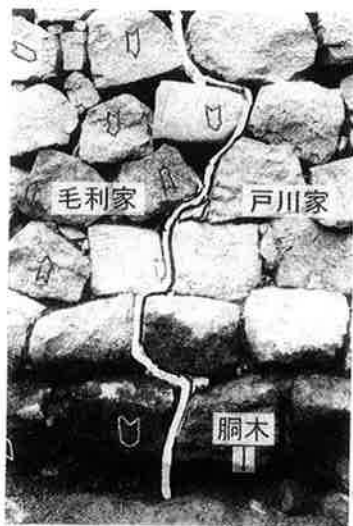


写真2 毛利家と戸川家の
丁場境③(線と紋強調)



写真1 通路部分の石垣③

は副紋であったがのち家紋となったとされる。◇印は形から四目結の簡略形ではないかと思われるが、普請場所
で使い分けた理由は不明である（図四、四目結紋と矢筈
紋 参照）。

四、東京競馬場の石垣

東京都府中市にある東京競馬場に佐伯藩の石が積んであるとの情報で見に行った。競馬場は開催日の土・日しか入場できないので、混雑しない中山競馬場開催日に行ったのだが、それでも場外馬券を買う客が大勢いた。パドック裏の静かな日本庭園に二段に積まれた石垣があった。説明板によると「ここに積まれている石は寛永十三年三代將軍家光が（中略）：昭和四五年日本中央競馬会本部の改築工事の際、地下四メートルのところから発見されたもの（中略）：ここにある「折敷に三文字」は豊後国臼杵城主稲葉一通、「丸に左」は日向国延岡城主有馬直純、「矢筈」は豊後国佐伯城主毛利高直、以上の記号であります」となっていた。旧中央競馬会本部は港区西新橋一丁目にあり、その位置は図一、の虎ノ門の文部科学省の東側に位置する。つまりここで発掘された石垣石を府中市



有馬家印



稲葉家印

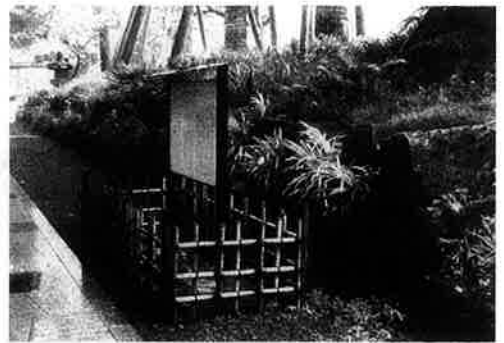


写真3 東京競馬場の石垣

まで運んで再構築したというのである。しかしながら八
二個の石は稲葉家印と有馬家印と無印が全体をほぼ三分
していて、毛利家の矢筈印は一個も見あたらなかった。
理由は不明だが佐伯藩の石が何らかの都合で運ばれな
かったのだと思われる（写真三、東京競馬場の石垣）。

五、虎ノ門物産ビル別館の石積

虎ノ門の中央競馬会本部は場外馬券売り場となつてい
るが、隣接の物産ビル別館敷地の隅にひっそりと小さく
積まれた石積のモニユメントがあつた。説明板には別館
建設時に地下から発見された江戸時代の石垣で、柳川立
花家、臼杵稲葉家、延岡有馬家、佐伯毛利家の四家の石
が発掘されたと書かれてあつた。しかしその一〇個の石
のうち三個に「折敷に三文字」の臼杵藩稲葉家印が見ら
れただけで、ほかは無印だつた。(写真四、物産ビル別館
の石積)。

六、馬事公苑のオリンピック記念碑石積

世田谷区の馬事公苑は一九四〇年に馬の育成振興や人
馬の技術向上を目的として作られた施設である。公園と
して解放されているが、植物系の園に対して動物がいる
庭という意味で苑を用いている。一九六四年の東京オリ
ンピックの際、馬術競技がここで実施されたことを記念
して、翌年虎ノ門で発掘された石を積んで記念碑とした。
それは城内の緑地に一四四個の石を積んで、馬術競技の
個人と団体の優勝者名が彫られた銅板がはめ込まれてい

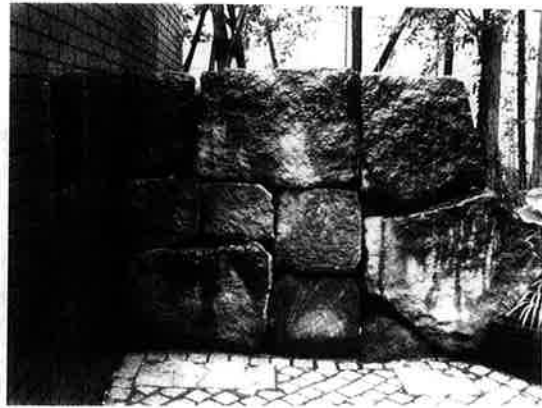


写真4 物産ビル別館の石積

た。説明板には他の二箇所同様、三代將軍家光の外堀普
請の石で地下四メートルから発掘されたものであること、臼杵
藩稲葉家、延岡藩有馬家、佐伯藩毛利家のものであるこ
とが書かれていた。

調べてみると稲葉家の「折敷に三文字」印の石が四九
個、有馬家の「丸に左」印の石が五個、そして毛利家の
「矢筈」印の石がわずか一個ながら確認できたのである。



写真5 馬事公苑のオリンピック記念碑

つまり中央競馬会関連三箇所の石積み説明はすべてこの説明の援用であった。それにしても三箇所で二三〇余個の石のうち、稲葉家印の石が約八〇個、有馬家印の石が約三〇個あったのに対し、刻印を多用した毛利家印の石はわずか一個で、あまりにも少なすぎた。

その理由を考えてみると、表一、に見るように白杵藩稲葉家と延岡藩有馬家は熊本藩細川家五万石の下で普請をしており、一方佐伯藩は前述したように岡山藩池田



写真6 馬事公苑の石積み刻印
 (左上：白杵藩稲葉家、左下：佐伯藩毛利家
 右：延岡藩有馬家)

家三一万石の下で普請をしていて、その間には福岡藩黒田家四三万石の普請場を挟んでいるから、そもそも三家の石が同じところから出ること自体が不自然である。ただ大名間で石の融通はあったらしいこともいわれているので、城地も近い白杵藩や延岡藩に融通された石の可能性はある。ともあれこの一石が現時点で一般人が目にするこのできる唯一の佐伯藩の石であるといえよう(写真五、馬事公苑のオリンピック記念碑石積み)。写真六、佐

伯藩の矢筈印、白杵藩の折敷に三文字印、延岡藩の丸に左印（これは家紋ではなく藩主の名乗りの左衛門佐によるものらしい）。

七、佐伯藩上屋敷発掘調査

佐伯藩の上屋敷は当初鍛冶橋を渡った大名小路にあった。隣は土佐藩の上屋敷で、一六〇八年の「慶長江戸之図」には「四十間四方森伊豫守」の敷地が「六十間四方土佐守高知城主山内一豊」、大河ドラマの主人公と並べて書かれている。伊豫守は伊勢守の誤りらしいが、この位置は新宿に移転するまで東京都庁があつた一等地である。この都庁跡も一九九二年に発掘調査され、井戸や溝の遺構、多数の什器に混じって「森市三郎様／焔ふり柿 斎藤権右衛門／包入六廻り」など毛利関係の名がある木簡二〇枚が発掘されている⑧。上屋敷は四代高重のころ松平土佐守と相對替えをして愛宕下に移転したことはよく知られているが、以後幕末までその位置にあつたから、藩士達は折に触れ先祖の普請した石垣を間近に眺めていたはずである。

八、佐伯藩の普請遺跡発見の意義

さて、発掘されたこれら石垣遺跡は埋め戻されてしまつて現在見ることはできないが、いずれ保存展示されるそうである。もし佐伯藩の石垣部分がそれに含まれて文化財となるようなら、当時の毛利公が思いもしなかつたことになるのであろう。

江戸はこの外堀工事によつて、以後拡大する外堀外側の町割の大要が決まつた。寛永十三年は三代家光が將軍になつて十余年、幕藩体制が確立し參勤交代制が始まつて幕府の勢いが最も強かつた時代である。一方で普請を負担した大名家が蓄財を使わされ力を失つていったことは十分うかがえる。

佐伯藩にとつて普請は初代高政の孫三代高直のときに当たるが、二代高成が若死したため幼児の市三郎が藩主になつたばかりで、当然藩の重役達の責任で実施したはずである。幕府の命令でやむを得なかつたとはいへ、継嗣問題を抱えていた小藩にとつて手伝普請は相当辛いものがあつたと思われる。刻印は佐伯藩のようにはぼ全ての石に打っている藩と、ところどころ打っている藩、ほとんど打っていない藩があるといわれる。佐伯藩は石丁

場を持つていなかったから、採取した石を混同されないように刻印を打ったのは当然であろうが、ほとんど全てに刻印が打たれた石垣を見ると、混同防止だけでなく精一杯工事をアピールしようとする小藩のけなげさが現れているように感じられてならない。

ともあれ、外堀石垣普請に参加した六一大名のうち、今回発掘された石垣で確認された大名は一〇家あるなしであり、さらに複数の箇所が見つかったのは佐伯藩、九鬼藩などしかなく、その上馬事公苑などで現在も見られる石があるのは佐伯藩だけである。しかも佐伯藩の多数の刻印は、各種資料にも頻出してあたかも発掘資料中の主役のような形である。それゆえ筆者の目にもとまったのであるが、公開見学会で二、〇〇〇人近く集まったという見学者たちに、その刻印群が佐伯藩の存在を強く印象づけたことは間違いあるまい。

なお、発掘された遺跡は柳川立花家が保有していた「江戸城普請分担図」が極めて正確な一級資料であることが証明したのであるが、佐伯藩の石ごとの刻印がそれを裏付ける上で大きな役割を果たしていたことは評価されていい。

余談だが、佐伯泰英という作家の小説に「密命」シリーズがある。その第一巻のあらすじは寛永六年に豊後相良藩二万石の藩主斉木高玖が書籍を収集していたが、その中に禁書耶蘇教関係のものが混じっていて、それを相良藩の分家が幕府に使喚したため、取潰しを恐れてやむを得ず書籍の一部を献上する羽目になった。その件をめぐって攻防戦が繰り広げられるという時代活劇である。佐伯藩がモデルであることは幕府への本の献上という事実のほかにも、矢筈紋、番匠川、養賢寺あるいは、斉木の殿様浦で持つなどの言葉が出てくるので間違いあるまい。読まれた方もあると思うが興味のある方はご一読のほど、単に物語としてもおもしろい作品である。

終わりに、今回の報告に当たって、千代田区立四番町歴史民俗資料館の金子智氏には、発掘調査報告書や館の発行誌とともに情報をいただくなど大変お世話になった。この報文に記載したものの大半はそれらに基づくものであり、ここに記して厚くお礼申し上げます。

參考資料

- ①千代田区立四番町歴史民俗資料館 平成十七年度特別展「江戸城の堀と石垣」展示品 H 17
- ②江戸城の堀と石垣 ―発掘された江戸城― 千代田区立四番町歴史民俗資料館 H 17
- ③資料館だより 第18号 千代田区立四番町歴史民俗資料館 H 14
- ④丸の内一丁目遺跡 日本国有鉄道精算事業団・千代田区丸の内一―四〇遺跡調査会 一九九八
- ⑤丸の内二丁目遺跡Ⅱ 東日本旅客鉄道株式会社・千代田区丸の内二丁目遺跡調査会 二〇〇五
- ⑥文部科学省構内遺跡 国土交通省・文部科学省・文部科学省構内遺跡調査会 二〇〇四
- ⑦文部科学省構内遺跡Ⅱ 霞ヶ関7号館PFI株式会社・大成 新日鐵 日本電設 三菱重工工業建設 共同企業体・文部科学省構内遺跡調査会 二〇〇五
- ⑧東京都埋蔵文化財センター調査報告 第17集 東京都千代田区丸の内三丁目遺跡 一―東京国際フォーラム建設予定地の江戸遺跡の調査― 第一分冊・第二分冊 一九九四
- ⑨江戸城外堀物語 北原糸子 筑摩書房 一九九九
- ⑩古地図(安政六年 江戸地図) 古地図史料出版株式会社
- ⑪古地図(寛永 江戸地図) 古地図史料出版株式会社
- ⑫東京都心で江戸城の石垣発見! ―岡山・庭瀬藩が築造― 東京事情日誌 岡山市
- ⑬府中市東京競馬場・虎ノ門物産ビル別館・世田谷区馬事公苑オリンピック記念碑 石垣説明板
- ⑭密命・見参!寒月霞斬り(密命シリーズ第一巻) 佐伯泰英 詳伝社文庫 平成11年